「キリストの完了された御業」

ローマ８：３４

堀田修一　２３・１２・１０

「だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるイエス・キリストが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです」：３４。
このみことばは、「だれが、私たちを罪ありとするのですか」という問いに４つの答えで「主を信じる者は罪ありとされることはあり得ない」と救いの確実さが強調されています。４ つのうちの２ つを先週味わいました。①主は私たちの罪のために死んでくださった。②主は、主の十字架のいけにえを神が満足し私たちの罪の贖いとして受け入れられた保障として復活された恵みを味わいました。本日は残りの③「神の右に着き」と④「しかもわたしたちのために、とりなしていてくださる」恵みを味わいましょう。

Ⅰ「神の右に着き」

１．このみことばの一つ一つが、偉大な神と罪人の私たちの交わりを回復する「仲保者」（神である主が人となられたクリスマスのご目的）という職務に着かれた主の恵みを常に覚えたい。神である主がクリスマスに人となりこの世に来られたのは、ひとえに「私たちのため」（事実の意味、教理の大切さ）でした。前回見た主の十字架の死と復活は、過去になされた豊かな恵み。本日、見る主の恵みは、現在、主がついておられる立場です。主は、私たちの罪のために十字架で死に、復活し、40 日、地上で弟子たちに現れ、もともとおられた天に昇られた、昇天された。今、主は天で「神の右の座に着いておられる」。

２．主が現在、着座されている立場は、ヨハネ 17 章に記された偉大な大祭司の祈りへの答えです。「父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を（三位一体の神が世界を造られる前、天で永遠の始めから持っておられた神としての交わりの栄光」１７：５。「神の右の座に着き」という事実が、どのようにして、主を信じる私たちの救いの最終的堅忍（救いは最初から最後まで神が守られる）につながります。

３．主が「神の右の座につかれた」のは、私たちのための偉大な「大祭司」として主が行っておられる御業を述べています。私たち人間にとり、偉大な神と罪人の私たちを取り持つ「仲介者、大祭司、とりなし手」がおられなければ、神に近づくことも、神と親しい関係を持つこともできないのです。大きな苦しみの中でヨブは神にとりなしてくださる方を渇望します。ヨブ１６：２１。※証し。大祭司、仲介者（神との交わりを可能にする者）の大切さは、ヘブル人への手紙で語られている主題です。私たちの主は、復活されてから、神の右に着座されるまで私たちの偉大な「大祭司（新しい契約の完全な仲保者、とりなし手）」としてのみわざを行われた。そのみわざを理解するためには、新約の主イエスを指し示す旧約聖書の大祭司が何を行ったかを知る必

要があります。旧約の大祭司の最も大きな役割は、年に一回、たった一度だけ、幕屋、又は神殿の最も奥まった「至聖所」という聖なる場所に入り、そこで大祭司にしか許されていない最も大切な任務がありました。その明確な説明がヘブル９：７－１２にあります→「第二の幕屋（至聖所。神の臨在される所）には年に一度、（新約の大祭司キリストを指し示す）大祭司だけが年に一度だけ入ります。そのとき、自分のため、また民が知らずに犯した罪のために献げる血を携えずに、そこに入るようなことはありません。…この幕屋は今の時を示す比喩です。…ささげ物といけにえが献げられますが、それらは礼拝する人の良心を完全にすることができません。…しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ（クリスマスに）、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました」。旧約の民は、大祭司が民の代表として血のいけにえで贖いを至聖所でするときに、神がその供え物を受け入れてくださったかどうかを知ろうと待っていました。大祭司が外に出てきたときに、民の罪のための供え物が神に受け入れられ、神が自分たちを祝福し続けてくださっていることを知りました。新約では、主が復活されたことで、主の十字架の贖いが神に受け入れられたと確信できます。

４．主は「神の右の座に着く」前に、旧約の大祭司の贖いのわざを行ってくださったのです。旧約の「いけにえ」と「大祭司」の両方が主キリストを指し示していました。主イエスは、ご自分の血を携えて「もろもろの天を通られ」天にある幕屋において、まさに神の御前で、私たちの救いのために、主の十字架の聖い血、私たちのためのいけにえの血を神にささげてくださったのです。これは、非常に慰めに満ちた御業です。

５．主が「神の右（右は栄誉を意味する）の座（神の栄光と支配、臨在の場）に着座（御子も神としての栄光と支配と権威を受けられた）」されたことは、私たちのための救い、贖いが「完成した、完了したこと」を証明しています。人でさえ、大きな仕事を成し遂げた時に満足して着座する。主が、御自分の血を御父にささげられることは、私たちの救い、贖いにおける最後の行為でした。その後になって、初めて、主は神の右（栄誉の座）にお着きになったのです。

Ⅱ「しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです」

１．これは、「私たちが、クリスチャンになっても、完全な人ではなく、失敗や罪、過ちがあります。私たちの救いが取り消されることにならないでしょうか？」という心配への励まし、答えです。ヘブル７章はこの個所の注解になります→「（旧約の祭司）レビの子らの場合は、死ということがあるために、務めにいつまでもとどまることができず、大勢の者が祭司（神と人の間を取り持つ者）となっていますが、イエスは永遠に存在されるので、変わることがない祭司職を持っておられます。したがってイエスはいつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことがおできになります」２３－２５。このみことばは、私たちの救いが決して取り消されるものではなく、完全で永遠の救いを確信させます。このみことばの意味は、主がクリスマス、十字架、復活、昇天以来、ご自分の御業による救いの恵みを主を信じる私たちのために確保し続けておられるという意味です。あらゆる恵みは、神からキリストを通して、キリストの御業のおかげでやって来るのです。

２．主が「私たちのために、とりなしておられる」とのみことばは、私たちに同情深い「大祭司、神と人の仲介者」がおられる事実を知らせています。「私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情（原語；共に苦しむ）できない方ではありません。罪は犯しませんでしたが、すべての点において、私たちと同じように試み（苦しみ）にあわれたのです」ヘブル４：１４，１５。※証し。ヘブル２：１８に「主は、ご自分が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになる」とあります。これは「私たちのためにとりなしておられる」御業の一部です。

３．「主が天でわたしたちのためにとりなしておられる」恵みとは、「主のクリスマス（神が人となられた）、私たちの罪のための十字架、死への勝利の復活、昇天し御父の右の座でとりなしておられるとは、私たちに罪の赦しと日々生きていくための必要（日ごとの糧）、神からのあらゆる祝福を用意されているという恵み！「ですから、私たちは、あわれみを受け、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座（神ご自身）に近づこうではありませんか」ヘブル４：１６。主が神の右の座で私たちのためにとりなしておられる恵みで、私たちが神の愛、あわれみを受けることは確実！賛美４６「今もとりなし」。